



「節目を尊ぶ、人生は旅」

令和三年
秋季例大祭齋行

松榮山報



どしいわい 令和4年 星祭・厄年・年祝のご案内

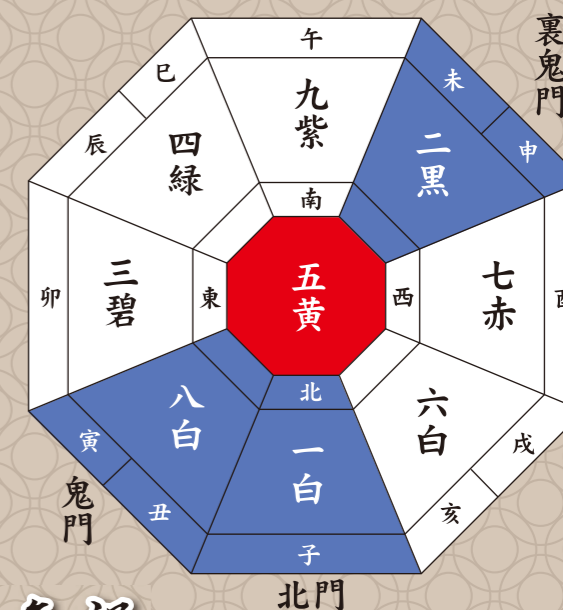
人は生年月日により、丸つの星「九星」(①一白水星から⑨九紫火星)に分けられ、運勢を考える基本となっています。

厄年とは異なり自身の星が**中央(八方塞がり)・北(北門)・東北(鬼門)・南西(裏鬼門)**に当たる年は運気が下がりやすく、災いが身に降りかかりやすくなるといわれています。来年の星回りが悪い方は星祭をして、1年の除災招福をお祈り致します。

星祭

※数元年

ほっほうふき 八方塞がり	鬼門	北門	裏鬼門
五黄土星	八白土星	一白水星	二黒土星
昭和7年生 91歳	昭和4年生 94歳	昭和2年生 96歳	大正15年生 昭和元年生 97歳
昭和16年生 82歳	昭和13年生 85歳	昭和11年生 87歳	昭和10年生 88歳
昭和25年生 73歳	昭和22年生 76歳	昭和20年生 78歳	昭和19年生 79歳
昭和34年生 64歳	昭和31年生 67歳	昭和29年生 69歳	昭和28年生 70歳
昭和43年生 55歳	昭和40年生 58歳	昭和38年生 60歳	昭和37年生 61歳
昭和52年生 46歳	昭和49年生 49歳	昭和47年生 51歳	昭和46年生 52歳
昭和61年生 37歳	昭和58年生 40歳	昭和56年生 42歳	昭和55年生 43歳
平成7年生 28歳	平成4年生 31歳	平成2年生 33歳	昭和64年生 令和元年生 34歳
平成16年生 19歳	平成13年生 22歳	平成11年生 24歳	平成10年生 25歳
平成25年生 10歳	平成22年生 13歳	平成20年生 15歳	平成19年生 16歳
令和4年生 1歳	平成31年生 令和元年生 4歳	平成29年生 6歳	平成28年生 7歳



厄年

	性別	数元年	生まれ年
前厄	女	18	平成17年
		32	平成3年
		36	昭和62年
	男	24	平成11年
		41	昭和57年
		60	昭和38年
本厄	女	19	平成16年
		33	平成2年
		37	昭和61年
	男	25	平成10年
		42	昭和56年
		61	昭和37年
後厄	女	20	平成15年
		34	昭和64年 平成元年
		38	昭和60年
	男	26	平成9年
		43	昭和55年
		62	昭和36年

年祝

	数元年	生まれ年	干支
十三詣	13	平成22年	寅(とら)
小厄(九越)	49	昭和49年	寅(とら)
還暦	61	昭和37年	寅(とら)
古希	70	昭和28年	巳(へび)
喜寿	77	昭和21年	戌(いぬ)
傘寿	80	昭和18年	未(ひつじ)
米寿	88	昭和10年	亥(いのしし)
卒寿	90	昭和8年	酉(とり)
白寿	99	大正13年	子(ねずみ)
百寿	100	大正12年	亥(いのしし)

運を開き、福を招く



令和三年 秋季例大祭を終えて



大分縣護國神社宮司
八坂 秀史

世にはびこる悪疫のためご参拝の方々の数を制限しての誠に心苦しい秋季例大祭でしたが、ご来賓ご遺族のご参列、ご奉仕の方々のお力添えにより無事に斎りましたことを心よりお礼申し上げます。皆様方の至誠のもと、御霊

たちの安鎮を懇ろに祈念申し上げた次第です。国政では新総理が選出されました。国の内外で間違いのない政(まつりごと)を執ってほしいと切に願います。ある候補者は出馬会見で、国の使命は「国民の生命と財産」「領土・領海・領空・資源」「国家の主権と名誉」を守り抜くことと「その使命を果たすために自分のすべてをかけて働く」と宣言しました。国護るその決意は一国のリーダーとして当然です。立派な覚悟です。折しも本年は先の大戦開戦八十年の節目の年です。いわゆる「開戦の詔勅」で昭和天皇はこの戦の目的は、自存自衛の為と明確に仰っています。御霊たちは今とは次元の異なる厳しく巨大な国難に立ち向かわれ、戦死されたのです。

いま時が経て、その御霊が心なごみ安らぐ道は何でしょうか。国の平和とご遺族のお幸せは申すまでもありません。さらには、御霊が日本の存在を護ってくれたように、いまを生きる日本人が国のため精を出すことです。御霊の心を己の心として汗を流す姿に御霊はきつと安らいでくださるでしょう。御霊を偲び、国の平和を祈り、自分も精を出す。春秋の例大祭や命日祭がこの思いを新たにする場であってほしいと願っています。

流行り病が一進一退するなか冬が巡ってまいります。来春、桜花のもと皆様方のお元氣なお姿を御霊がご覧になり、より安らいでくださるよう祈ってやみません。

十月九日 粛々と 秋季例大祭を 執り行う



世の中がコロナ禍であることを忘れさせてくれるような美しい秋空。それは一昨年まで変わらずに行われていた十月九日のその日ではないだろうか、錯覚するような穏やかな秋日和のなかでの令和三年の秋季例大祭になりました。

神社本庁からのお遣いである献幣使として大分県神社庁長神日出男様をお迎えし、当神社役員総代をはじめ、県下各界の代表の方々、そしてご遺族崇敬者の方々にご参列いただき、滞りなく大祭を執り行うことができました。

大分縣護國神社の奥深くにお鎮まりの四万四千四百五十八柱の御霊たちは、今の日本や世界の国々をご覧になつてどのように感じておられるでしょうか。人々を恐怖に陥れ、世の中を混乱させているコロナ感染症。このような流行り病で大切な命を落とした人々の無念さは如何ばかりかと思えます。まさしく自然界と人間の綾が生み出してしまった第三次世界

大戦であると専門家が述べているように、このコロナ禍は罪なき人をも犠牲にする大きな災害であるとも言えます。恐ろしい人智を超えた領域に人類は立たされている思いがします。大東亜戦争で尊い命を犠牲にしてこの国を護ってくださいました御霊たち。我が身我が命と引き換えにして日本の平和を保障できたと安堵されていたでしょう。現在の状況をさぞかし口惜しく思っているに違いありません。

今、このような世の中において日本人としていかに正しく生きるかが問われています。日本人としての誇りの精神とはを、教える人が少なくなつてきていることが現実として立ちのびだかっています。戦後七十六年を経て、戦争を目の当たりにして戦禍を逃れることができた人たちと同様に、御霊の深い思いや声なき声やひとつひとつ遺した言葉を伝える人たち、戦争の語り部たちが徐々に少なくなつてきています。長い時間の流れや速さのなかでの自然淘汰に近いものがあります。御霊をお祀りしている大分縣護國神社には、言霊記念館の展示をはじめ、戦争の証が貴重な資料として残されています。日本の歴史の一端とともに自分自身を見つめ直す場所でもあります。現在のこのような苦難の時こそ、過去を振り返り今を感謝をし、そして未来に力強く立ち向かう努力や、正しい思慮とはを気づかせてくれる「気づきの神社」としてあるのです。

ソーシャルディスタンスでの祭典は、ご参列いただいた方々にはご不自由を、そしてご参列いただけなかった方々にはまことに心苦しいばかりでした。御霊たちもさぞかしご遺族に会いたいだろうにと思つと胸に込み上げるものがありました。御霊へのお慰めはもちろん、国の平和と国民、大分県民の幸せ、そして各ご家庭で英霊をお祀りされているご遺族、また日頃より護國神社にお心をお寄せいただいている崇敬者の方々の日々の暮らしが穏やかであるようにとご祈念し、さらにコロナ禍が一日も早く終息するようにとの願いを御霊に捧げた秋季例大祭でした。





撮影 / 波多野雄治氏 撮影場所 / 別府市天間

天皇陛下、皇居にて稲刈りをされる

九月二十一日に皇居内の水田において天皇陛下御自ら稲刈りをされました。この稲作の行事は農業奨励のためにと昭和天皇が始められ、上皇陛下を経て代々天皇陛下が行っている大変有り難い行事です。

今年刈り取られた品種は、うるち米の「ニホンマサリ」ともち米の「マンゲツモチ」の二種類。丁寧に二十株ほどの稲に鎌を入られました。赤坂御所から内装を終えた皇居の御所に御一家で引越しをされた翌日のことでした。新しい生活を始められ、それを嘉みなさるかのように、収穫の感謝といよいよ国民の平安への思いを篤くされたの出御であったことと拝察いたします。

陛下は四月に種もみを撒き、五月二十六日にお田植えをされました。多くの人たちは農家まかせであるお米を、手ずから育てられて収穫されているお姿に、畏れ多くも日本人のあるべき姿をお示しくださっているように思いました。お米は古くから我が国と日本人の宝であり、また日本を指して瑞穂の国と言われるほど神代より貴重な穀物として続いています。まさしく命、そのものです。

稲作の起源について、記紀神話においては、ニギノミコトが天上界から地上に降りる（天孫降臨）に際し、天皇陛下の大御祖である天照大神が稲穂を授けたことを起源とするとされています。天皇陛下が大切にされている稲作、お米とのつながりには、遥か長い歴史があり、それを日本人が

享受し長く命の源なっているということになります。稲作から派生して生まれた日本の伝統文化や食文化、作法などは数えきれないほどあり、その第一が神様への捧げ物、神饌です。

陛下がお田植えされ、この秋に収穫されたお米は新穀として、まもなく宮中三殿で行われるご親祭である新嘗祭でお供えして、天神地祇（てんしんちぎ）に陛下御自ら感謝の奉告をされます。また同じように伊勢の神宮に奉納され、勅使を遣わして国民の平和と安寧を祈念されます。

コロナ禍ではありますが、私たちも今年の新穀を口にして天皇陛下がいらっしゃる麗しい日本。そして他国にはない素晴らしい日本の歴史や古人（いにしえびと）を思い、日本人の矜持を呼び覚ましながら、皇室の弥栄、日々の暮らしへの感謝に思いを致し、常に見守ってくださいている神様への祈りを、心を込めて捧げたいものです。



九月二十一日 国際平和デー

「愛、世界平和の奉納揮毫」

全国四十七社の護國神社にて、和プロジェクトTAISHI主催による世界平和を願う行事が一堂に行われました。

大分縣護國神社では国内をはじめ、世界的に活躍している大分市在住の書家・松本重幸氏による、「以和為貴」「国家安泰」「和敬清寂」の三種の言葉が、墨跡も鮮やかに一気呵成と書き上げられていきました。いずれも現代を生きる私たちにとって非常に意義のある、静かにして力がみなぎってくるような四字熟語、言葉でした。

聖徳太子が定めた十七条の憲法第一条冒頭の言葉「以和為貴」。有名な「和を以って貴しと為す」の「和」は、やわらぎとも解されています。協和や協調を重んじる内容です。今年の夏に行われた東京オリンピック・パラリンピックのコンセプトであった「多様性と調和」。コロナ禍であったことや、さまざまな紆余曲折を経た開催ではありましたが、日本だから無事に行われたのではないかと世界中から称賛されています。そこには日本人の美しい精神である「調和」が息づき、「多様性」を存分に活かした結果として、穏やかにやり遂げられたのではないのでしょうか。

今回の世界平和デーで揮毫された「以和為貴」の四文字。千年以上の時を経て聖徳

太子が説いた言葉は、東京オリンピックを通して脈々と我々現代人の心に引き継がれていることを改めて深く感じました。世界的な大きな競技大会を体験して、日本人の底力、アイデンティティの奥深さの再発見ができたのではないのでしょうか。

コロナ感染が一日も早く終息し、国民等しく活力や希望を持てる暮らしが戻り、国が富み栄えますように、そして隣国からのさまざまな暴挙から日本を護れますように、英霊たちにお護りいただけますようにとの願いを込めた「国家安泰」。

そして、茶道の心得を示す標語の「和敬清寂」。主人と賓客がお互いの心を和らげて謹み敬い、茶室の備品や茶会の雰囲気も清浄にすることという意です。千利休の定めた「和」、「敬」、「清」、「寂」を表す「四規」として重要視されていますが、これもまた日本人の得意とする「おもてなしの心」の根本であるとも言えます。

先人が私たちに残した数々の言葉は、その時代の人々に求められた大きな指針であったに違いありませんが、時を経てもお色あせることなく、今を生きる私たちの暮らしの随所にさらに役立ち続けている貴重な訓えであることを、改めて気づくことができた松本重幸氏の奉納揮毫でした。



近年、パワースポットと呼ばれる場所が増えました。和製英語らしいです。もともと景勝地、観光名所だったり、そこに神宿り御利益があるといわれ信仰され続けています。そのような場所にある神社には、さらに人を癒す水があったり、神宿る御神木があったり、人に語りかける岩があったり、磁力を発する断層があったりします。自然崇拜の場であったところが伝統的な霊場や聖地として今にあります。パワースポットと呼ばれる場所は、自然溢れるところであり、そこにはいにしえより神仏をお祀りする神社仏閣があるため、当然のことながら繁華街のような場所がないのがほとんどです。



「パワースポット 癒しの空間」

禰宜 後藤 尚

良い方法のひとつです。人によって感じるものは異なります。相性が良い悪いや波動が合う合わないということもあります。自ら足を運び「ピン！」と感じた場所が、あなたにとって最高のパワースポットといえるでしょう。神社にお参りすると神聖な気持ちになります。一般的に神社は古い歴史があります。石段を登っていくと本殿があり由緒正しい雰囲気伝わってきます。ピシッと背筋が伸びる感じの神社。神社は、開放的でどこかゆるーい雰囲気があります。近寄りたくも、しかしリラックスできる感じは、地元根付いて数百年の神社だからこそ寛大さや寛容さを感じます。まさしく「来るもの拒まず」の有り難さと言えるでしょう。文化財がいくつもある神社。神宝から発せられるエネルギーもあります。参拝の折には見どころごとく、それぞれの神社にある宝物館へ足を運ぶことも良いでしょう。



「神あり人には神があり、神なき人には神はなし」

コロナ禍でなかなか旅行にも行けません。早く通常に戻ってほしいものです。旅をすることで又、新たな発見があるかもしれません。

自然の中で気を敏感に感じる事ができるように、深呼吸を繰り返してみよう。空に向けて両手を大きく開き、エネルギーを取り込むような気持ちで思いきり深呼吸するのも良いでしょう。また、その大地や水に触れたり、周りに温泉があればお湯に浸かってリラックスしたり、その地の名物のおいしい食べ物食べてみるのも、「氣をもらっ」「心を癒す」こととして



雄大な由布山の右に寄り添うイモリガジョウ

私はしきりに由布山に誘うが不安な家内はそのふもとの低い山がいいと言いつ張る。(…やむなく策を練ることに…)。昔々イモリの王様がいたと云うそのイモリガジョウ(一〇六七M)は山頂から南に長く延びる草地の裾野が麗しい。秋晴れのもと雄大な由布山を見上げ登山開始。草原を進み雑木林を抜け五〇分で合野越に至る。すでにバテギみの家内のため小休止。水場も近いここでは高校の頃よくキャンプをした。さて出発(ここでマル秘作戦に)。家内の気を引きつけながら右の由布山登山道へササッと進む。赤松の林を抜け何回かジグザグするとやがて標高は一〇〇メートルほどに。木々の間から見え隠れする真横のきれいな山をチラチラ見て家内は何か言っているが黙々と歩く。ますます眺望が開けさすがにこれはおかしいと家内が確信した時、眼下には向かっていいるはずのイモリガジョウが。「?あれは」。私「あいやく合野越で道間違ったかハハ」。家内「△×◆&…!」。怒りの炎上凄まじくもはや言葉ではない。「マー ココマデキテシマッタノダカラ コノママ由布二ノボリマセウ」。世迷い言を並べる夫とたばかられた自分を呪いに呪っていたがそのうちトボトボ歩きだした。かくして秘策は見事に成功したかに見えた、が!。つづら折りが終わり心臓破りの石段も越えもうすぐマタエ(東峰西峰の分岐点)、でソレは襲ってきた。「足が…:つりそう」と家内。即効薬を飲ませ左ふくらはぎを揉む、しばらく揉む。山中でのけ

いれんは本人も大変だが場合によってはオオゴトになる。マタエまではあと僅か、だが頂上は更にその上そして:行けば戻らねばならぬ:今日はここまで、急登の岩場で断念した。だましました合野越まで下り遅めの昼をとるも申し訳ない気持ちでフツフツ。目のイモリガジョウへの案内板が恨めしそうに見つめる。「行こか」、十分後にはその頂きに。頂上全体の窪みが太古の火口を物語る。北には山麓を装った双耳峰の巨大な由布山、南側足元に開ける湯布院盆地の向こうにくじゅう連山が青く霞む。東側かなたには大分市街地、自宅あたりに目を凝らす。高一の娘と来たのはもう十年前か。素晴らしい眺めに連れ合いもすっかり御満悦(めでたしめでたし)。帰路行きに見上げたならかな草原を下っているとかシワの疎林で後ろから「あなたッ!」。なんと鹿が現れた、野生の成獣、シカも二頭!涼しい顔で私たちの間に。ゆっくりとナイフを手にするが二人してフリーズするシカなかった。この日三回見かけその最後で出くわしたのは正に三度目の正直。食害の注意書きを思い出しながら午後三時無事? 下山。今回の山行は家内にとっては人災だった。本人の体力と経験を軽んじた私の秘策どころか小細工の結末だ。お詫びと自責の念を伝える。「次は登る!」の言葉に救われたが、いずれ必ず由布山頂上にいざなおう。「今日は由布山!」と朝ハッキリ伝えて。

これからの祭典行事案内

さいさきもうで 幸先詣と初詣

世情を鑑み、年の初めの初詣を、今年12月より来年3月までの幅広い期間にて、年末の「幸先詣」と年明けの「初詣」といたします。ゆっくりとご参拝ください。

- 幸先詣/新年の幸(さち)を先(さき)にいただきますよ 令和3年12月1日~12月31日
- 初詣/令和4年1月1日~令和4年3月21日(春分の日)



大祓式 (冬至・年越)

いづれも 火滅神事あり



知らず知らずのうちに、また気づかないうちに心や体についてしまった半年間のさまざまな過ちのお祓いを行う六月と十二月の大祓式。今年も二十四節季のひとつ冬至の日と一年の終わりの大晦日に、いにしえより続く大祓いの神事を執り行います。ぜひご参加ください。

■日時/ 令和三年十二月十九日(日)冬至の大祓 十二月三十一日(金)年越の大祓 十二月十五日(水) 必着

新しい年への一文字募集

時世や平安と希望の思い、そして叶えたい夢。あなたの新しい年への一文字を募集します。

■募集期間 令和三年十一月一日(月)~十二月十五日(水) 必着

■書初日 令和四年一月二日(日) 正午より

詳しくは社務所までお問い合わせください。